平成30年度「ＪＡ青年組織手づくり看板全国コンクール」審査講評

全国農協青年組織協議会が主催する平成30年度「ＪＡ青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国29都道府県から67作品（看板部門57点、アート部門10点）の応募があり、平成31年１月28日(月)に東京・大手町のＪＡビルで審査委員会を開催しました。作品募集テーマは昨年同様「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」とし、インパクト(設置場所選択を含む)、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

なお審査は、全国消費者団体連絡会、ＪＡ全農、ＪＡ共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、ＪＡ全中の各団体からお集まりいただいた広報担当の職員など８名の委員で行い、審査委員長は互選により、全国各地の青年部活動を記事として取り上げていただいている雑誌『地上』の編集長である魚谷 昌宏 氏が選ばれました。

審査の結果、最優秀賞には「**ＪＡ三次青壮年連盟（広島県)**」の作品が選ばれました。地元の振興作物であるアスパラガスを、目立つ色とかわいらしいデザインで表現し、「クセになる」とのフレーズからはおいしさが伝わってくるなど、たいへんインパクトのある作品となっています。地場農産物を効果的に強調しており、最優秀賞に相応しい作品として多くの審査委員から評されました。

アート部門賞には「**ＪＡ遠州中央青年部委員会（静岡県)**」の作品が選ばれました。堤防と地域の生活道路の間、およそ1,000坪の土地一面にひまわりを植え、広大な「ひまわり迷路」を作った作品です。迷路をアートと捉える斬新なアイデアであることに加え、参加型であることからアピール力にも優れています。さらに、迷路の全体像から子供たちが楽しそうに駆け回っている姿が目に浮かび、想像をかき立てるつくりになっていることから、アート部門賞に相応しい作品として多くの審査委員から評されました。

（各特別賞について）

○ 全国消費者団体連絡会賞「**ＪＡ津軽みらい みなみ地区青年部　松崎支部（青森県)**」

力強くりんごを握る青森ねぶたをデザインすることで、一目で青森と青森の特産品が脳裏に焼き付くなど、地域の特性と農産物が強く印象に残る作品として評価されました。

○ ＪＡ全農賞「**ＪＡきたひやま青年部（北海道)**」

昨年に大賞を取った流行語を盛り込みながら、３人の女性が車座になっておにぎりを楽しく美味しそうに食べる様子が表現された作品です。日本の食はやはり米が中心であることをシンプル

に表現するとともに、「うちのごはんおいしいね～」「そだね～」のやりとりから、北海道産米を連想させるなど効果的にＰＲしている点が評価されました。

○　ＪＡ共済連賞「**ＪＡいわて花巻　花巻地域青年部　笹間支部（岩手県）**」

若者の就農促進、地域活性化をテーマに制作された作品です。収穫した野菜を持った農業女子がこちらを振り返る様子はさわやかな若者らしく映り、農業の魅力・かっこよさを表現するとともに女性の農業参加もＰＲする内容となっていることが評価されました。

○　農林中央金庫賞「**ＪＡながさき西海青年部　針尾支部（長崎県）**」

ＡＩやスマート農業といった技術革新が進む中であっても、農業の基本は人が愛情を持って耕すことであると訴える作品であり、人が耕し農を知ると書いて「人耕知農」とし、ＡＩを「愛」と表現するなど、訴求力のあるメッセージとして高く評価されました。

○　日本農業新聞賞「**ＪＡ秋田ふるさと青年部　雄物川支部（秋田県）**」

夏の甲子園で地元・秋田県だけでなく全国を大いに沸かせた金足農業高校を連想させるフレーズと墨文字を効果的に使っており、シンプルでわかりやすい作品として評価されました。

○　地上賞「**ＪＡ岩手ふるさと水沢地域青年部（岩手県）**」

「故郷は人を育てる田んぼです。」とのキャッチフレーズは、コンクールのテーマである「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」に合致する内容であり、田んぼをモチーフにしたふるさとの風景も重なり、キャッチフレーズの文字がとても見やすく、強く印象に残る作品として評価されました。

○　農協観光賞「**ＪＡ菊池青壮年部　菊陽支部（熊本県）**」

赤色を強調した看板づくりは火の国・熊本を連想させ、地元農畜産物を真ん中に添えながら、剣の達人として晩年は熊本で活躍した宮本武蔵の二刀流を「おいしい」と「安全」にかけるなど、効果的なＰＲが評価されました。

○　ＪＡ全中賞「**ＪＡ十和田おいらせ青年部　藤坂支部　藤坂分会（青森県）**」

「やっぱり米だな」と自信たっぷりな子供の表情が印象的で、小学校の正門前に看板を掲示することで、次世代を担う子供だけでなくその親にも、日本の食は米が中心であることを効果的に訴えかけることができている点が評価されました。

（総評）

今回のコンクールに寄せられた作品は、どれも創意工夫が施され、かわいらしくデザインしたり、流行語を取り入れるなど思わず笑ってしまうようなフレーズを入れた作品から、メッセージ性に富んだ作品まで一つ一つが個性にあふれていました。また、地域の特色も踏まえて制作されるなど、地元に密着して取り組んでいることが読み取れました。

本年度についても特にデザインのレベルは高く、手作り感を出しながら絵画のようなタッチやコミカルに仕上げるなど、様々な工夫が凝らされていました。

また、屋外に設置する看板であることから、遠くから見ても目を引くことが重要になります。シンプルでわかりやすいメッセージや、はっきりとした色使いで視認性を高めることが重要となります。青年部盟友同士で議論を重ね、伝えたいテーマを絞り込んでいくことでより訴求力の高い作品となるのではないでしょうか。

アート部門については、受賞作品以外にも非常に大規模な作品や地域性を取り入れた作品など創意工夫あふれる作品が寄せられました。次年度以降もアイディアを出し合い、様々な作品作りにチャレンジしていただければと思います。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず、テーマである「農業のある地域づくり」を実現するために「どうメッセージを伝えているか」という点が最大の評価ポイントとなりました。その基準として、設置場所が効果的かどうかも重視されました。作成にあたり、誰にメッセージを伝えたいのか、そのためにはどのような場所に設置することが望ましいかについても議論していただければと思います。今回は、学校や通学路への掲示を通じて子どもや保護者へのアピールを行っている組織が見受けられ、審査員からも高い評価を受けました。

その他、デザインの親しみやすさ、地域の特徴を取り入れているかどうか等が受賞の決め手となりました。

今回応募された作品をきっかけに、地域住民の食と農に対する理解が深まり、それぞれの地域で住民と一体となった取り組みにつながることを願います。また、盟友と協力して看板の制作に取り組むことで、青年部盟友の絆が強まり、各地の青年部の活動もより活発化していくことを期待しております。

今後も本コンクールの開催が各地盟友の看板制作の励みになること、そして青年部の看板・アート作品が全国に広がり、日本農業・地域社会の情報発信源となることと確信しております。

【審査委員】（敬称略）

魚 谷 昌 宏＜審査委員長＞（家の光協会・編集本部地上編集部 編集長）、小 倉 寿 子（全国消費者団体連絡会・政策スタッフ）、落 合 成 年（全国農業協同組合連合会・広報部 部長）、上 野 温 司（全国共済農業協同組合連合会・調査広報部 部長）、岡 元 純 児（農林中央金庫・広報ＣＳＲ企画室広報ＣＳＲ担当部長）、行 田　　元（日本農業新聞・広報局 局長）、田 中 義 隆（農協観光・総務部 副部長）、福 園 昭 宏（全国農業協同組合中央会・広報部 部長）